The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The effect of perceptual training on the learning of Japanese fricative and affricate contrasts by native Thai learners of Japanese
Author(s)	Tanporn, Trakantalerngsak
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/59642
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（TRAKANTALERNGSAK TANPORN）	
論文題名	The effect of perceptual training on the learning of Japanese fricative and affricate contrasts by native Thai learners of Japanese （タイ人学習者による日本語摩擦音及び破擦音の学習における知覚トレーニングの有効性）

論文内容の要旨

タイ人日本語学習者は、日本語の摩擦音・破擦音の発音においてしばしば両者を混同しており、習得が困難であると指摘されている。タイ人学習者による摩擦音と破擦音の混同は、聞き手の意味の混同にもつながり、コミュニケーションに大きな支障をきたすことが予想される。また、日本語母語話者にとっては幼児のような発音と受け取られかねず、マイナスの印象を与えることも予想される。

日本語教育現場における実践的音声教育の研究は未だ少ないが、英語教育における発音指導に関する研究は実践的研究も含め数多く行われている。中でも、ESL(English as a second language)の発音指導には、英語の正しい知覚範疇の形成を促すという目的の下でHVPT法の知覚トレーニング(High Variability Phonetic Training)が導入され、分節音でも超分節音でも大きな効果のあることが確認された。HVPT法の知覚トレーニングは多種多様性が重視され、さまざまな音環境と語中位置に現れるミニマルペアの音声の強制選択肢の同定と区別、多数の母語話者の音声の聴き取り、また、回答直後に即時の正誤のフィードバックを行うなどの手法が取られている。このトレーニングは発音指導における大きな効果のあること、具体的にはL2における聴取能力の向上、さらには知覚範疇の形成・産出のプロセスの正確性の向上に対して有効であることが明らかにされている。

上述の知覚トレーニングの概念に加えて、第二言語習得レベルを母語話者レベルまで引き上げることを目指す学習においては、自分自身の発音に対する意識を高めること―自己意識化―が必要であると指摘されている。これらの認識に基づき、本論文では、日本語発音指導に未導入であるHVPT知覚トレーニングと、それに加えて新たに、学習者に自分自身が発話したものを聞かせるという、自己モニタリングの概念を組み込んだ実験を行った。つまり、本論文は、指摘されている聴取・発音の混同を改善するための日本語発音指導方法の提案を目的とする実践的研究である。

本論文では、目的達成のために次のような実験を行った。31名のタイ国在住のタイ人学習者に被験者として実験に参加してもらい、11名を知覚トレーニングをしない統制群、残りの20名を知覚トレーニングを行う2つの実験群（A群：11名、B群：9名）に分けた。実験群のみに5週間にわたり15分～20分程度のHVPT法の知覚トレーニングを計9回実施し、知覚トレーニングがもたらす効果に関して検証を行った。実験群A群およびB群に対しては、まず同定タスクを課し、B群のみに対して、自己モニタリングの区別タスクを合わせて実施した。これによって自己の発音に対する認識の促進、すなわち自己意識化がトレーニングの効果においていかなる差を生ずるのかについて検証した。トレーニング効果の測定にはプレテスト、ポストテスト、般化テスト（Generalisation test）と6ヶ月後のディレイポストテストの計4回のテストを実施した。プレテストから般化テストまではおよそ3ヶ月間に渡って実施し、その6ヶ月後にディ

レイポストテストを実施した。

実験結果は以下のようにまとめられる。

⑴まず、知覚テストに関しては、統制群においても実験群AとB群においても正聴率の成績に上昇が見られた。全群で上昇が見られたものの、実験群AとBのポストテストの正聴率が統制群を有意に上回った。つまり、HVPT法の知覚トレーニングをすることで日本語の摩擦音と破擦音における聴き取り能力がより効果的に向上することを示す結果となった。また、実験群AとBにおいては正聴率そのものに有意差は見られなかった。結果からは、成人学習者のL2音声に対する知覚能力の向上を確認した。これらの聴き取りにおける正確性の向上を示す結果から、トレーニングを行うことによって、成人学習者であっても知覚範疇の形成や組み変えが可能となること、また産出のプロセスの正確性の向上、不正確な知覚の改善に至ることが確認された。

⑵自己意識化をさせた実験群Bのみに見られた特徴として、新語および新しい話者が発話した音声に対してトレーニングの有効性の転移が見られた。　⑶さらに、実験群AとBのみが知覚トレーニング終了から6ヶ月後にも、向上した聴き取り能力を保持していた。

⑷産出テストに関しては次のような結果となった。日本語母語話者の判断による同定評価と典型性評価をおこなった結果、知覚トレーニング後は日本語の摩擦音と破擦音の産出において正確さと明瞭度が向上したことが認められた。つまり、知覚トレーニングしかしていないにも拘わらず、それが産出能力にも転移し、向上したことがわかる。このことから、知覚と産出の間には関係があることが示唆された。

さらに、実験を通じて観察された事象からは、知覚と産出のプロセスにおける両者の相関性をより強く認識するに至った。これにより、第二言語習得研究においては、グループ平均値のみではなく、個人差をより考慮したうえで音声習得に至る要因を分析する必要があるという考察を本論文の成果の一つとして提示したい。

本論文では、タイ人学習者のために効果的な発音指導の実践方法を提案することを目指し、HVPT知覚トレーニングの効果を検証した。その結果、般化テスト以外では両実験群でトレーニングから同等の効果が得られたことから、HVPT知覚トレーニングを用いた知覚訓練は摩擦音と破擦音の習得に対して有効であることがわかった。トレーニングを実施した実験群にみられた摩擦音と破擦音の知覚における長期的な効果の発現と産出への転移がHVPT法の知覚トレーニングの有効性を証明したと言える。さらに、実験群Bに行ったように、発話音声を自己モニタリングする自己意識化トレーニングを取れ入れることにより、HVPT法の知覚トレーニング効果に加えて新語と新しい話者の発話の定着率が高められ、発音習得によりよい効果をもたらすという概念が支持できる。

本論文の結果としては、タイ人日本語学習者における日本語の摩擦音と破擦音を区別・産出する能力の改善において、知覚トレーニングが一定の効果をあげるものであると述べる。また、学習者に自らの発音を認識させる自己意識化の重要性を提案するものである。本論文では全体的に有効性を示す結果が得られたが、今後はさらに被験者のデータを蓄積した上で再度トレーニングを行い、詳細な分析をもとに知覚トレーニングの有効性に関するより精緻な確認を行う必要がある。研究対象として他の子音と母音を取り入れることやトレーニング手法の変更も行いつつ、よ

り効果的な知覚トレーニング手法の構築に結び付けたい。

以下に、各章の概要を述べる。

第１章は「序論」であり、本論文の構造および各章の関連性を示す。

第２章は「先行研究」として、前半は、L2 音声学習、 SLMやPAMなどのL2音声学習モデル、知覚と算出の関係について叙述する。また、ここでHVPT法の知覚トレーニング方法について一概する。先行研究で効果があると評価されたトレーニング方法のうち数種類は、本実験でも取り入れていることをふまえて概説する。後半は先行研究で指摘されたタイ人学習者の摩擦音・破擦音の発音および聞き取りの問題点や日本語教育における音声教育の現状についてその概要をまとめ、最後に、先行研究の結果や改善すべき点などを参考にしながら、本研究の目的と研究課題を示す。

第３章は「実験方法」で、先行研究をもとに、本実験で取り扱う調査方法を示す。

第４章は「結果」であり、章の前半部には計4回のテスト結果および、これらの実験から明らかになったことを提示する。章の後半は、知覚と産出の相関関係の分析結果と、合わせて実施した被験者へのアンケートとフォローアップインタビュー結果である。

第５章は「考察」とし、課題に対する解答を提示しながら、本論文の研究結果を明らかにする。これをもとに日本語音声教育方法の具体的な提案を行い、HVPT知覚トレーニングの応用を提言する。

第６章は「まとめ」と題して、本論文を総括し、最後に、残された問題点や今後の課題について論じる。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ Trakantalerngsak Tanporn ）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教　授	岩井　康雄
	副 査　教　授	郡　史郎
	副 査　教　授	宮本　マラシー
	副 査　教　授	眞嶋　潤子
	副 査　名誉教授	角道　正佳

論文審査の結果の要旨

本論文は、タイ語を母語とする日本語学習者が日本語の摩擦音、破擦音習得を効果的に行う日本語発音指導法を提案する実践研究である。

タイ語母語話者にとって、日本語の摩擦音、破擦音習得は困難を伴うものとされている。上級とされる学習者でもマイナスの印象を与える発音が見られる。本研究では、その改善のための効果的な指導法をHigh Variability Phonetic Training（以下、HVPT）をベースに学習者自身の発話を聞かせる「自己モニタリング」の手法を組み込んだ指導法を実践し、その効果を検証している。

31名のタイ在住、タイ人学習者を統制群11名、実験群Ａ11名、実験群Ｂ9名に分け、実験群Ａおよび実験群Ｂに5週間にわたり、1回15分～20分程度のHVPT法の知覚トレーニングを9回行った。知覚トレーニングは複数の日本語母語話者による多様な音環境をそろえた72のミニマルペアの発音を用いて行われた。更に実験群Ｂのみに自己モニタリングの課題を課した。いずれのトレーニングもコンピュータを用い、学習者が自律的にトレーニングを進めるシステムを構築し、行われた。

トレーニングの効果はプレテスト、ポストテスト、般化テスト（generalization test）、更に6ヶ月後の定着度テストによって評価された。トレーニングは知覚トレーニングだけであったが、その効果が発音にどのような影響を与えるかを調べるため、プレテスト、ポストテストでは学習者の発音評価も行っている。

結果は、統制群に対して実験群はいずれも有意に知覚能力の向上が見られ、かつ両群とも6ヶ月後のテストにおいても知覚力の高さを維持していた。Ａ群とＢ群の間では、Ｂ群のみに新語や新しい（トレーニングで聞いていない）話者の発音した音声に対しても有意な知覚力の向上効果が見られた（般化テストによる）。また、産出においても、実験群は日本語母語話者による同定評価、自然性評価のいずれにおいても正確さ自然さが増す結果が出ている。これは知覚トレーニングのみを行った場合でも産出能力に転移、向上が見られることを意味しており、知覚と産出の間に関係があることを示唆している。

本論文は、タイ人学習者のための効果的な発音指導の実践法を提案することが目的であり、何故「自己モニタリング」が「般化」に繋がるのか等、仮説の域を出ない議論も見られるが、これまでにも様々に議論されてきたHVPT知覚トレーニングの効果を検証し、更に自己モニタリングを加えることで、自己意識化が一定の機能を果たすことを示し得たことは、実践的な教育法の開発に対し、大きな貢献をするものである。

本研究は、これまでの多くの研究をつぶさに検討し、堅実な手法により、自身の主張の検証を行っている。これらの点を鑑み、本審査委員会は、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位論文と認められるものとして、全員一致で合格と判断した。